

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04682

研究課題名(和文)言語力の体系と系統に関する実践研究

研究課題名(英文)Practical study on the system of language ability

研究代表者

坂口 京子 (Sakaguchi, Kyoko)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：60440591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：思考力、知的能力、方法知との関連を図り言語力を育成する上では、選択する・再出することに関わる能力・態度を螺旋的かつ系統的な指導していくことが重要である。

選択する・再出することにかかわる活動として、視写・書き抜き・書き替えがある。1. 育成においては、聞くこと・見ること・読むこと(1～4年)、話すこと・語り合うこと(5～8年)、編集する(9年～)の重点化を意識する。2. 学習指導においては、学習者の実態を踏まえた教育内容の選定と再構成を行い、学習者の問題意識や自己表現の開発を促す。3. 評価においては、個々の学習者の自己表現の過程を見取り、論理的かつ客観的に問い直しながら支援していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1点目は、全教育活動に働く言語力育成において、思考力、知的能力、方法知との関連を図る上で、選択する・再出することの行為化を目指すことが重要であることを明らかにした。

2点目は、言語力育成において、国内外の先行実践に共通する学習指導、評価方法のスタンダードを抽出した。

3点目として、選択する・再出することの行為化においては、重点化する活動として、聞くこと・見ること・読むこと(1～4年)、話すこと・語り合うこと(5～8年)、編集すること(9年～)の系統が認められることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In order to develop a language ability by relating to thinking ability, intellectual ability, it is important to provide spiral and systematic guidance on the ability and attitude involved in selecting and reproducing.

Activities related to selecting and reproducing are "slide / draw / rewrite". 1. In training, be aware of the importance of listening, seeing, reading (1-4 years), speaking, discussing (5-8 years), and editing (9 years-). 2. In the learning instruction, the content of education is selected and reconfigured based on the actual situation of the learner, and the learner's awareness of problems and the development of self-expression are encouraged. 3. In the evaluation, the learner's self-expression process is examined, and the students are logically and objectively asked to assist.

研究分野：教科教育学

キーワード：言語力 選択する 見る 論理的思考

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題を発見・追究・解決する過程に働く「言語力」は従来の「国語科」教育という枠組みで論じられるものではない。重要なのは、全教育活動を通して育成される言語力とは何か、その定義と内実を明確にし、どのような学習指導と評価方法によって育成し得るかを構想することである。

(2) 第八次学習指導要領国語科編(2008)の提案する指導事項は、言語力の体系や系統という点で、また、児童・生徒の言語発達を適切にふまえるという点で課題が残る。小学校第1・2学年の「C 読むこと」の指導事項には、「オ 大事な言葉や文を書き抜くこと」「カ 楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」、同第3・4学年には「カ 目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと」がある。しかしながら、「大事な」観点から叙述を選択する、「選んで」読むという能力・態度はきわめて高度である。単に「選ぶ」という活動を経験させるのではなく、思考力、知的能力、方法知との関連を図りつつ言語力を育成する上では、言語力の体系や系統を改めて検討するとともに、学習指導における留意点を明確にしていくことが重要である(坂口2015a)。

2. 研究の目的

(1) 基盤研究(C)2011~2014:課題番号23531221「言語力の体系と育成に関わる基礎的研究」において、思考力、知的能力、方法知との関連を図り言語力を育成する上では、選択する・再出することの行為化、すなわち選択する・再出することに関わる能力・態度を螺旋的かつ系統的に指導していくことの重要性が明らかになった。選択する・再出するについては次のように説明を加えた(2015b)。

ここでいう「選択する」は、授業構想の様々な位相に働く現象である。まず認識能力の中で重点化し、その行為化までを目指して螺旋的かつ系統的に支援する対象である。また学習の目的・場に意識化することで、認識対象・認識能力・認識活動の動的連関を起動する機能でもある。一方の「再出する」は、選択することを契機としての言葉化であり、材のある表現行為全般である。選択する場に立つことで判断しようという意思・思考が立ち上がり、理由・経緯が言葉化される。また叙述(根拠)から、あるいは叙述と叙述を関係づけて、あるいは表現形式(場・型)に即した叙述や表現を選択肢、言葉は生み出される。説明や再話、要点や要旨の再構成、表現形式の転換、空所の想像等がその主なものである。

以上を継続する本研究では、言語力の体系と系統を明らかにする上で、優れた先行実践を対象とし、選択する・再出することに関わる能力・態度をどのように育成していくか、学習指導と評価方法について検討する。その上で、今後のスタンダードを策定することを目的としている。

(2) 研究期間内に明らかにしようとするのは、

先行実践における言語力育成において、視写(書き抜きを含む)・書き込み・書き替えがどのような教科・領域において、どのような段階を捉えて指導されているか。

全教育活動に働く言語力、中でも選択する・再出することに関わる能力・態度を育成する上で、先行実践において学習内容・学習方法・評価にどのような配慮と特徴が認められるか。の以上2点である。

3. 研究の方法

(1) 小・中学校における国語科学習を言語力育成の視点から実態調査する。研究協力者の国語科授業実践を対象とし、視写・書き込み・書き替えの学習状況、指導状況について調査する。並行して児童・生徒の実態調査を行う。実際の授業記録・分析にあたっては、以下の学校および先生方にご協力いただいた。

国立大学法人静岡大学教育学部附属静岡中学校(木下聡美教諭)

静岡県静岡市立安倍川中学校(下田実教諭)

静岡県沼津市片浜小学校(大川由紀子教諭)

静岡県沼津市立第二小学校(鈴木奈美教諭)

(2) 小・中・高等学校における探究学習(トピック学習を含む)および国語科以外の教科学習を言語力育成の視点から実態調査する。研究協力者の実践を対象とし、視写・書き込み・書き替えの学習状況、指導状況について調査する。並行して児童・生徒の実態調査を行う。実際の実践分析・資料収集にあたっては、以下の学校および先生方、識者にご協力いただいた。

国立大学法人静岡大学教育学部附属静岡中学校

国立大学法人奈良教育大学附属中学校

ドイツ・ミュンヘン・イスマニングシュタイナー学校(肥後佳恵教諭、子安文氏)

(3) 2018年現在の国語科教科書(中学校・高等学校「国語総合」)を言語力育成の観点から分析する。読書指導および探究学習(問題発見、資料収集・調査、表現・発信)の視点から傾

向と課題を明らかにする。

(研究当初は、戦後新教育期から能力主義移行期までの国語科・社会科教科書(小学校～中学校)を考察対象としていたが、期間内での収集が困難であった。2020年5月段階で社会科教科書(1950～1958年)を入手したため、今後の課題としたい)

4. 研究成果

(1) 先行実践における言語力育成において、視写(書き抜きを含む)・書き込み・書き替えがどのような教科・領域において、どのような段階を捉えて指導されているか。

視写(書き抜きを含む)・書き込み・書き替えは、先行実践においては、一連の認識活動として捉えられている。文化・教養の身体化、思考や問題意識の意味付け、知識や価値の再構成、行動意識の選択、科学・文化・価値の創造といった観点である。以上の認識活動を通して、客観的な自己認識や論理的思考の伸長が目指されている。

客観的な自己認識や論理的思考に資する言語力を育成する上では、「視」る、すなわち「見ること」がきわめて重要であり、「見ること」は認識と自己表現の起点として位置付けられている。

視写(書き抜きを含む)・書き込み・書き替えに関わる学習指導においては、発達段階に応じて重点すべき活動がある。国内外の実践に共通する系統、留意すべき点を抽出したのが次表である。重点化する活動を指導者が意識化することで、言語力育成における緩やかな系統が担保できる。

学年	重点化する活動	留意すべき点・学習過程
1～4年	○聞くこと ○見ること ○読むこと	○聞き浸る、聞き取る態度・習慣の定着 ○視覚化・音声化による文字や図形等の再生や創出 ○文字や文章等の意味化 ○相手や状況の実感的理解・推察・評価
5～8年	○話すこと ○語り合うこと ○討議すること	○疑問や問いの創出や再構成 ○思考過程(葛藤・試行錯誤)の発信 ○学習計画、視点や立場、理由や根拠、データや事象・事例等についての問い直し、さらなる共有 ○価値観や探究態度の問い直し、さらなる共有
9年～	○編集すること	○知識や問いの深化や再構成 ○知識や学びについて意味の問い直し ○自身の価値意識の形成、物語り直し、行動選択 ○科学・文化・価値の再構成、創造

今回の調査範囲においては、1～4年段階では話題やテーマに関するトピック学習および国語科、5～8年段階では各教科における問題解決学習、9年段階からはテーマに関する探究学習および国語科において、視写(書き抜きを含む)・書き込み・書き替えの学習活動が重点化されていた。

(2) 全教育活動に働く言語力、中でも選択する・再出することに関わる能力・態度を育成する上で、先行実践において学習内容・学習方法・評価等にどのような配慮と特徴が認められるか。

学習内容においては、指導者が自身の専門性を基盤とし、学習者の実態に即して内容の価値づけと選択を行なっている。「表面的なものの下に残る本質的なもの・概念」の重視(坂口2020a)や、「題材化」の工夫(坂口2020b)等は、国内外の先進的実践に共通するものである。学習者の実態を見取った上で、指導者自身の創意によって学習内容が選択され再構成されることが、思考力、認識能力、方法知を培う上での重要点となっている。

学習方法については、指導者が模倣し体得すべき教養・文化・価値を選択して提示するとともに、学習者の認識や意味付けにおける論理性・妥当性を問い、新たな問題意識や価値創造、行動意識につなげている。問題解決型学習の各過程において、以上の意味付けを問い直す学習方法が適宜選択されている(坂口2018、坂口2020c)。

5学年以降の学習方法における共通点として、以下が抽出された。

- ・ 問いの発見(概念を問う、一般的認識への葛藤、立場選択に伴う試行錯誤)
- ・ 事実・事象の確認(資料調査、データ分析、叙述や表現の吟味、具体的経験の想起)
- ・ 学習計画や問いの再構成(必要に応じて、また個々の学習者に即して)
- ・ 価値観や意味付けの交流、評価(問答、対話、語り合い、記録、面談)

この各過程は「編集過程」として位置付けられ、先も述べたように、「選択」に伴う「意味化」が特に重視されている(坂口2020c)

学習の評価については、個々の学習者の思考や自己表現を認め、問題意識の深化や拡充を支える機能が重視されている。指導者がひとり一人の学習状況や成長を継続的に見取り、対話(直接的対話・記述等での間接的対話)による評価を施している(坂口2020a、坂口2020b)。

学習環境として、個々の学習者が疑問や葛藤、試行錯誤等を表出できる点が整えられている。指導者は統率とともに、学習者の自己表現（内面や思考の発露）自体を尊重している。

（３）言語力育成においては、各教科および領域において問題解決的学習が展開されるが、その際、学習者の疑問（問い・問題）の醸成が最も重要であること、学習指導において教育内容の価値・特徴との連関を果たすこと、「言語化能力」「論理的思考力」「判断力」の各認識能力を螺旋的に指導していくことの重要性を指摘した（坂口 2015b）。

本研究での成果をふまえ、改めて認識能力の体系について整理したのが以下である。

- ・言語化能力（感受、符号化、事実・事象との照合、順序、価値付け、意味化）
- ・論理的思考力（比較、分類、名づけ、照合、推論（類推、帰納、演繹、仮定）、総合（関係付け、一般化、構造化）、想像・創造）
- ・判断力（好悪、抽出、選択、決断、展望）

【文献】

- 坂口京子（2015a）「言語力育成における『選択する・再出する行為』 柳田国男監修教科書と現代の先進的実践を架橋する観点から」『静岡大学教育実践総合センター紀要』23号、静岡大学
- 坂口京子（2015b）実績報告書（基盤研究（C）2011～2014：課題番号23531221「言語力の体系と育成に関わる基礎的研究」）
- 坂口京子（2018）「教師の選書を視点とした読書指導の改善」『早稲田大学国語教育研究』第38集、早稲田大学国語教育学会
- 坂口京子（2020a）「イスマニング・シュタイナー学校における言語力育成の考察 自己認識の出発点としての「見ること」 - 」投稿中
- 木下聡美・坂口京子（2020b）「読書と表現を核とした中学校国語科の授業実践と評価 カリキュラムと評価（「追求の記録」と定期考査）の工夫 - 」『静岡大学教育実践総合センター紀要』30号、静岡大学
- 坂口京子（2020c）「第十章 わたしの存在・わたしの自由、他者とわたし」浜本純逸監修・幸田国広編『探究学習 授業実践史をふまえて』溪水社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木下聡美・坂口京子	4. 巻 30
2. 論文標題 読書と表現を核とした中学校国語科の授業実践と評価 - カリキュラムと評価（「追求の記録」・定期考査）の工夫	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 234 - 243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00027126	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 坂口 京子	4. 巻 38
2. 論文標題 教師の選書を視点とした読書指導の改善	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学国語教育研究	6. 最初と最後の頁 17 - 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 坂口京子	4. 巻 806
2. 論文標題 横断的視野と系統的視野、資質・能力の見取りと言語活動の設定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 16 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 坂口京子	4. 巻 538
2. 論文標題 主体的・協働的な「読むこと」を推進する資質・能力の育成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 4 - 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 坂口京子、沼津国語同好会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 静岡学術出版	5. 総ページ数 293
3. 書名 物語文教材研究のヒント 国語の授業作りで悩むあなたへ	

1. 著者名 浜本純逸監修・幸田国広編・坂口京子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 233
3. 書名 「第十章 わたしの存在・わたしの自由、他者とわたし」『探究学習－授業実践史をふまえて－』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	下田 実 (Shimoda Minoru)		
研究協力者	木下 聡美 (Kinoshita Satomi)		
研究協力者	大川 由紀子 (Okawa Yukiko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 奈美 (Suzuki Nami)		
研究協力者	肥後 佳恵 (Higo Yoshie)		
研究協力者	子安 文 (Koyasu Fumi)		